

【語彙・文法】(○＝語彙・●＝文法・☆＝常識。ただし重なるところも)

- 率る ○おびたし ●打つなる ○成る ○奏す ○さりともし ○かつがつ ☆物
●めり ○いらふ ☆御髪おろす ☆かはらぬ姿 ○見ゆ(非見す) ○案内 ○はかる
○さぶらふ(○) ○すかす ○さるべし ○おとなし

【問】

① 点線部1「率て出だしまゐらせたまふ」の主語は誰か。

(宋) が (南) も

② 二重傍線部A「なる」・B「めり」を文法的に説明せよ。

A 推定「なり」(体) 確見確定
「なるひがみこむる」

B 推定「めり」(止) 複覚憤報
「するのが見えり」

③ 点線部2「さりともしあはれにおぼしめしけむ」とはどういうことが、事情がよくわかるように説明せよ。

(直) そはれもいしけむしおぼしめしになつたこと、
「さりともし」(覚悟してはいたものの) 「さるの行動で又変が起つた」
「あはれに」(もう取返しがつかないのだから、大変なことをしてしまつた) 後悔

④ 点線部3を品詞分解して現代語訳せよ。

帝頭 御後ろを(格) 対象 見(動) 上(格) 補動 下(格) 過推(格)
名 御後ろを(格) 対象 見(動) 上(格) 補動 下(格) 過推(格)
「御後ろ姿を見申し上げたのだらうか」
「鬼＝天神が」(死山天皇へ)

⑤ 点線部4「朕をばはかるなり」とはどういうことか。

私をばはかるのだなあ 詠嘆(発見)
「兼家父子の謀略に出家した後」
天皇が出家(出家)したのを見たときに(兼家)殿が父に(道兼(兼家)殿)が

⑥ 点線部5「もしさる事やしたまふ」とはどういうことか。

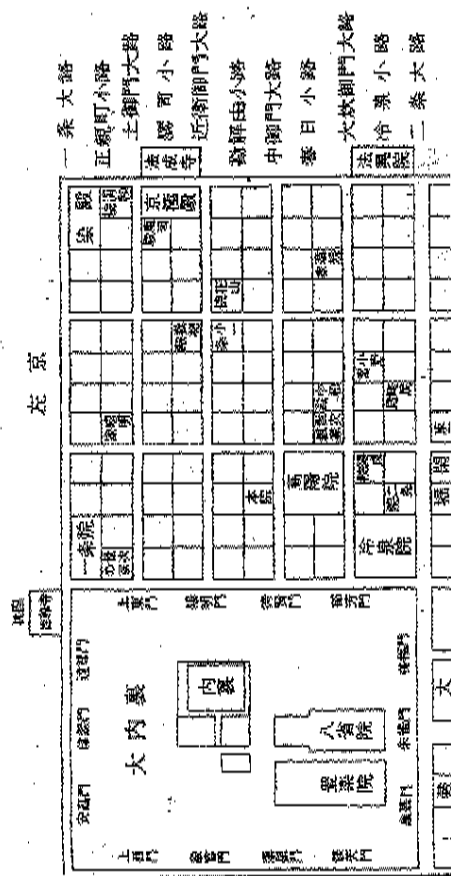
(直) もしそんな事をしなすものか (東三条院の) 後悔
「もしかすると」(そんな事) (もし) (もし) (もし) (もし)
「兼家殿が」
「成る」(成る)

【現代語訳】

そうして土御門から(大内裏の外へ)東向きに(道兼が帝を)連れ出し申し上げなさる途中で、安倍晴明の家の前をお通りになったところ、(晴明)自身の声がして、手を騒がしく、ばんばんと打つのが聞こえる。(晴明が)「帝が退位されるという天文の異変があつたが、すでに現実になってしまったと見えるぞ。参内して奏上しよう。車に支度をせよ」と言う声を(帝は)お聞きになったであろう、(帝は)そうは言っても(寛悟の上のご出家ではあるが)お胸に刺さるものとお思ひになっただろうな。(晴明が)「取り急ぎ、式神一人、内裏へ参れ」と申したところ、目には見えない何ものかが戸を押し開けて、(帝の)お後ろ姿を見申し上げたのだろうか、「たつた今、ここをお通り過ぎなさつたようです」と答えたとか。晴明の家は土御門通りに面した角にあつたので、(帝が花山寺に向かう)お通り道であつたのだ。

(帝が)花山寺にご到着になって、剃髪してしまわれた後になって、栗田殿(道兼)は、「(いったんここを)失礼いたしまして、父大臣(兼家)にも出家前の姿をもう一度見せ、かくかくしかじかと事情を説明してから、必ず戻つてまいりましょう」と申し上げなさつたので、(帝は)「(道兼は)私を騙していたのであつたな」といってお泣きになった。お気の毒で悲しいことだな。常日ごろから、よく(道兼は)「(帝が出家なさつたら、私は帝の)お弟子になってお仕えしましょう」と、嘘の約束を申し上げていなさつたというのが、恐ろしいことよ。

東三条殿(兼家)は、もしや(道兼が)そんな事(出家)をしなさるのでは、と危惧して、それにふさわしく思慮分別のある人たちや、何とかかんとかという剛勇で知られた源氏の武者たちを、護衛にお付けになったのだ。京の区域内では隠れていて、鴨川堤のあたりから姿を現して参上した。寺などでは、もしや強引に誰かが(道兼を法師に)し申し上げるのではと思つて、一尺ほどの短刀を鞘から抜きかけて(白刃を見せて)お守り申したという。



この晴明、ある時、広沢僧正の御坊にまゐりて、物申しうけたまはりけるあひだ、若僧どもの晴明にいふやう、「式神をつかひ給ふなるは、たちまちに人をばころし給ふや」といひければ、「やすくは、えころさじ。力を入れてころしてん」といふ。「さて虫などをば、すこしの事せんに、かならずころしつべし。さていくるやうをしらねば、罪をえつべければ、さやうの事よしなし」といふほどに、庭に蛙のいできて、五つ六つばかりをとりて池の方さまへ行きけるを、「あれひとつ、さらば、ころし給へ。こころみん」と僧のいひければ、「罪をつくり給ふ御房かな。されども、こころみ給へば、殺してみせ奉らん」とて、葉の草をつみきりて、物をよむやうにして、蛙のかたへ投げやりければ、その草の葉の蛙のうへにかかりければ、蛙、まひらにひしげて死にたりけり。これを見て、僧どもの色かはりて、おそろしと思ひけり。家の中に人なきをりは、この式神をつかひけるにや、人もなき部を上げおろし、門をさしなどしけり。

〔注〕○広沢僧正——寛朝（元一六—九九八）。宇多天皇の孫で、嵯峨の広沢にある遍照寺に住んだ。○虫——小さな動物。爬虫類や両生類も含まれる。

【参考の訳】

この晴明が、ある時、広沢僧正の僧坊に参上して、物を申したりお聞きしたり（親しくお話し合いを）していたときに、若い僧たちが晴明に言うには、「あなたは式神をお使いになるそうですが、（式神を使つて）すぐさま人をお殺しになることができますか」と言つたので、（晴明は）「簡単には殺せないでしょう。力を入れてやれば殺せるでしょう」と答えた。（晴明が）「そうして虫などなら、少しの事をしましたら、必ず殺してしまえます。しかし生き返らせる方法は知りませんので、罪を得ることになりましょうから、そのようなことは無益です」と言つていると、庭に蛙が出てきて、五六匹ほどが跳ねて庭のほうへ行つたのを見て、「あれを一匹、それなら殺してみてください。あなたの力を試してみたい」と僧が言つたので、「罪を作りなさるお坊さんだな。しかし、私をお試しになる以上は、殺してみせ申し上げよう」と言つて、草の葉を摘み切つて、何か呪文を唱えるようにして、蛙の方へ投げやつたところ、その草の葉が蛙の上にかかったとみると、蛙はべしやんこになつて死んでしまった。これを見て、僧たちは真つ青になつて、恐ろしいと思つた。（晴明は）家の中に使用人がいないときは、この式神を使つたのだろうか、人もいないのに部を上げ下ろししたり、門を閉めたりしていたという。

*『宇治拾遺物語』には他にも晴明が法師の式神を隠して屈服させる話、蔵人少将や藤原道長を他の陰陽師の呪詛から守る話があり、晴明が陰陽道の第一人者として認識されていたことがわかる。